

## 6. ヤシ

### 長距離移動

早朝に目を覚まし、窓辺からライトアップされている時計塔を眺めると、薄い霧が掛かっているものの雨は降っていないようだ。旅立ちの支度を終え6時40分にフロントへ降りると、オーナーが一人フロント内の椅子に坐っていた。背後のキーケースを見ると、宿泊者は私一人のようだ。タクシーを呼んで貰うと5分ほどで到着。彼が外まで送ってくたので、別れの握手をする。何かと評価を下げ続けたこの宿だが、最後は気持ち良く出かけることができた。

タクシーは多少遠回りの道を選んだようでもあるが、5分ほどで駅に到着。レシートを紛失したので正確な料金は判らなくなったが6lei(130円)、ぐらいにチップを1lei足した。

コンコースには明かりが点り、10人くらいが佇んでいる。しかしこれは7時8分のシビウ行き列車を待つ人がほとんどだった。コンコースの発着表示を見るとブラショフ行きが40分遅れていると表示されている。日常的に遅れていることを知る人や、切符を買うとき注意された人は8時頃になって駅にやってきたようだ。延着することを知っていながら、定刻が7時14分発だとそれに合わせて来ってしまう石頭が哀しい。

ともかく1時間近くを待つうちに、次第に人も増える。ロマ(いわゆるジプシー系の民族)の子供も列車を待っているようには思えないが4人ほどいた。ロマはルーマニアでもかなりの差別を受けてきたようだが、それとの関連はさておいて、かなり迷惑な人たちであることは事実のようだ。すぐ金をせびったりするし、手癖も悪いと云われている。ともかくトラブルにならないよう関わりを持たず、所持品に注意を払い間違っても放置などしないようにする。

7時半頃になって待合室に黒い帽子、外套、ズボンで髭を15センチくらい伸ばしたジイサンが入ってきた。たまたま待っている場所が近かったためか、親しげに話しかけてくるがルーマニア語、はたまたひょっとするとユダヤ語ばかりで、英語はまるで通じないので会話にならない。彼が、「イスラエル」と云ったのは判ったものの、これにしてもイスラエル国籍を持っていると云うことなのか、ユダヤ人だと伝えたかったのか不明だった。

**SOSIRI** 26-Nov-2012 07:06:01

Tren Nr.	Din directia	Via	Ora	Int.	Linia
R 14843	ODORHEI		07:04	0	3
R 3500	TEIUS		07:12	40	2
R 3501	BRASOV		08:53	0	3
IR 1347	BUDAPESTA		09:07	0	2
IR 374	BRASOV		09:46	0	3
R 2563	SIBIU		09:59	0	1
R 3531	BRASOV		10:50	0	4
R 3502	TEIUS		10:56	0	2
R 18263	BRASOV		11:12	0	3
IR 1745	BUCURESTI NORD		11:38	0	3
R 14844	SIBIU		11:38	0	2
R 14853	ODORHEI		12:39	0	3

**PLECARI** 26-Nov-2012 07:06:15

Tren Nr.	In directia	Via	Ora	Int.	Linia
R 14843	SIBIU		07:08	0	3
R 3500	BRASOV		07:14	40	2
R 3501	TEIUS		08:55	0	3
IR 1347	BUCURESTI NORD		09:09	0	2
IR 374	BUDAPESTA		09:48	0	3
R 3502	BRASOV		11:01	0	2
R 18263	TIMISOARA NORD		11:19	0	3
R 2564	SIBIU		11:24	0	1
IR 1745	SATU MARE		11:41	0	3
R 14844	ODORHEI		12:12	0	2
R 14853	SIBIU		12:42	0	3
IR 1746	BUCURESTI NORD		14:14	0	2

駅コンコースにある到着・出発表示の液晶パネル。別の場所にあったものを合成。上が到着で下が出発。ティウス(TEIUS)発ブラショフ(BRASOV)行きが40分遅れていることが判る。



上:ブラショフ行き普通列車。下:普通列車の車内。





上:ブラショフ到着。下:カツサンド。

8時近くになって放送がある。ルーマニア語なので内容は皆目判らないが人々が動き出したのでそれに同調する。地下道を通って3番線ホームへ行くと、間もなくブラショフ行きの普通列車が朝霧の中から姿を現す。20人ほどが乗車したが3両編成の車内は空席が充分あったので、進行方向左側の窓際に席を占める。左側にしたのは風景を撮影するのに順光線になるからだが、生憎なことにこれとは云うような風景が出現しない。

先ほどのユダヤ老人は顔見知りなのか、そんなことは気にしないのか、ほとんど会う人ごとに言葉を交わし握手する。車掌もその対象だった。

約50分の遅れで発車した列車はそのままの遅れで進行し、ブラショフに着いたのは11時ちょっと前だ。

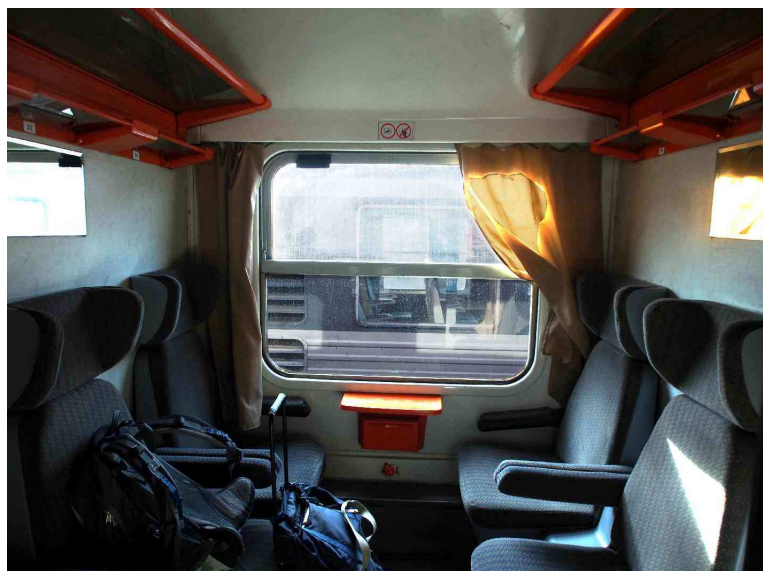
1時間の列車待ち合わせなので、昼食を摂れそうな所を駅界限で探す。ところが立ち食いスタンドの類は多いものの、食堂が見付からない。駅ビルの2階には喫茶軽食コーナーがあったが食べ物は不味そうだし、酒を

飲めるような雰囲気はさっぱりない。潔く諦め、改めて駅前のスタンドでハンバーガー8.5lei(184円)を買う。ちなみにハンバーガーとスタンドに書かれていたのだが、実体はカツサンドだった。

コンコースは人の動きが結構あり、おまけにスリや置き引きなどに注意しなければならないから落ち着かない。そんなことで早々ホームに移動した。幸い当該列車は既に乗車が可能だった。時間もたっぷりあったので、号車番号と座席番号を慎重に調べてコンパートメントに入る。発車まで半時間ほどあるから無人だったが、ともかく荷物を置いて身軽になると、後はこの列車を先頭から最後尾まで眺めたりして時間潰しをする

発車時刻も近づき席へ戻った。コンパートメントは6席でゆったりしている。発車直前に乗り込んできたのは3歳くらいの幼児を連れた母親だった。金ラメのやたら派手な靴を履いている。彼女は座席指定をしていなかったようで、途中から60代後半の夫婦が乗り込んでくると、隣室へ移った。

同室になった夫婦の妻は片言の英語で話しかけてくるが、夫の方は20年前クリーブランドに1年いたというのに、ほとんど喋れない。しかし日本人とコミュニケーションすることには興味があるようで、妻を介して色々話しかけてくる。列車の窓ガラスを指して、「日本ではこんなことはないんだろう。」という。日本へ行ったことがあるのかと思ったが、妻の説明ではTVなどの日本紹介による知識らしい。



ブラショフ発ヤシ行き列車の2等コンパートメント。



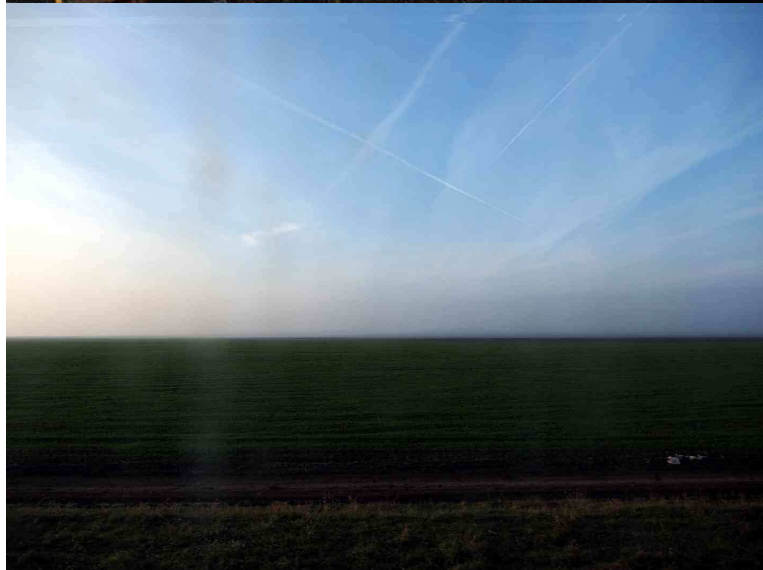
日本の一般的給与額に関し尋ねられ返答に窮する。ネットブックを開き紀行文用に調べていた国民一人当たりGDPの数字を見せ、日本、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアの比較として提示(日本36,179\$、ハンガリー19,499\$、ルーマニア12,579\$、ブルガリア12,340\$)する。

ヤシはルーマニア北東部の街なのに、列車はひたすら南下を続ける。2時近くなり、ブカレストの北59キロのプロイエシティ・ヴェスト駅でようやく進行方向が変わった。ちなみにこの駅は鉄道の要衝で、日本で言えば東京から来た線路が上信越線や高崎線と東北線に別れる大宮駅に相当するだろうか。しかし遙かに鄙びていて、そこに味わいを感じるところだった。同室だった夫婦はこの駅で下車し、以後終点まで一人で行く。

黄昏からさらに宵の闇が迫ってくると、無事今目指す宿に辿り着けるか、取り越し苦労とも云うべき不安が少しずつ増大してゆく。だからといってひたすら列車が到着してくれるのを待つしかない。

それでも確実に列車は進み、定刻の8時29分にヤシ駅へ辿り着いた。逸る気持ちを無理にも落ち着かせ、まず英ガイドの地図と現地のすりあわせを慎重に行う。英ガイドの推奨であり、Booking.comを利用して予約したマジェスティック・ペンションはグーグル地図によれば駅から徒歩9分の所にある。進むべき方向が定まり、キャリーカートを引き張って歩き出した。

しかし駅前広場を出ないうちに、右手にあるマクドナルドが目に入った。酒は持参しているがツマミはあまりないし、夕食のために宿から出るのも億劫に感じられた。そんなことでビッグマック



上:プロイエシティ・ヴェスト駅。赤い帯の制帽を被った女性は駅長だろうか。  
下:見渡す限りの大平原。3時28分。窓ガラスの汚れがでてしまった。

### ヤシ市街平面図

0 200m

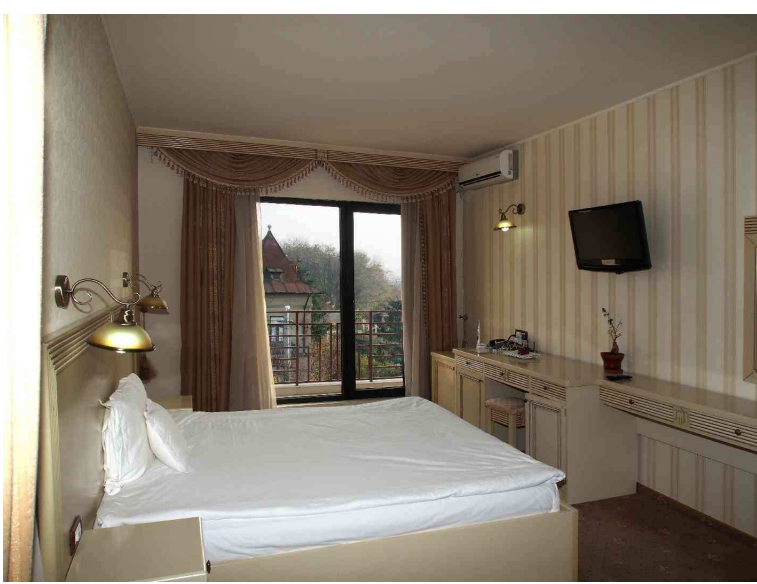
9.3lei(202円)を一つ買い込む。

駅前を北東に進み二つ目の交差点でアーク通りへ右折する。此処で食品店を見つけて再び寄り道。ヨーグルト2種類、3.2lei(69円)と3.95lei(86円)を調達し、ビッグマックと一緒にデイパックにしまう。

アーク通りを100メートルも行かず右へ分岐する枝道へ逸れ、そこからマジェスティック・ペンションは指呼の間だった。方向音痴が夜道にもかかわらず一発で辿り着けたのだ。マジェスティックはスポーツクラブも運営しているためか明るい看板が出ていた。







泊まった部屋。翌日の2時半に撮影。

道路から正面階段を7段上がったところが玄関で、ドアを押し開けて中に入ると正面がフロントだった。いかにもホテルマンと云った中年男が笑顔で迎えてくれる。例のごとく下見した部屋は2階の東向きでベランダも付いている。付近の交通量は少ないようなので、騒音は気にしなくても良さそうだ。フロントへ戻りチェックインする。



朝食はビュッフェ方式。

### ヤシの教会群と文化宮殿

明けて11月27日はどんよりとして今にも降り出しそうな曇り空だった。8時に朝食堂へ降りる。朝食はビュッフェ方式で、簡素だが十分な品揃えだった。

簡単に朝食を済ませたものの、天候が今ひとつだったので外出したのは10時半近かった。出掛けにフロントで市街平面図を貰う。広げれば横90センチ、縦70センチほどのもので裏表に印刷されている。

1:70万分の地方図、1:17,500の市街全

体図、1:8,000の主要部拡大図などがある。これから訪れようとする箇所を表になるように畳み直しカメラバッグのマップポケットに挿した。

まずは統一広場を目指す。この広場から始まるシュテファン大公大通りに、主たる見どころが集中しているようだ。通りの名前はシュテファン3世にちなむようで、彼は15世紀のモルドヴァ公国の公であり、正教会では列聖されている。反オスマン帝国闘争を展開し、1475年にはヴァスルイの戦いに勝利したそうだ。

閑話休題。広場に面して建つグランドホテル・トライアンは英ガイドの特にお奨めホテルだった。かのエッフェル設計で1882年に建設された由緒ある宿だ。四つ星にもかかわらずBooking.comの提示値段は227lei(4,923円)とそれほど高くはない。

しかし目の当たりを見ると宿自体は大変に魅力的なのだけれど、接するアルク通りはおそらくヤシで一番交通量が多く、車の往来は途切れることがない。130年前の防音では、おそらく室内でかなりの騒音に悩まされると思う。



グランドホテル・トライアン。



## ヤシ

ルーマニア第2の都市で人口32万人(2002年)。ブクレシュティからキエフを経由しモスクワへ至る鉄道が通る交通の要衝でもある。

かつてはモルダヴィア公国の首都だった。シュテファン大公の時代(15世紀後半)には隆盛を極めたが、その後に遷都され、またオスマン軍、クリミア・ハン国軍、ポーランド軍、コサックなどの襲来により度々破壊された。現在見ることのできる街の古い建物は、1827年の大火以降に建設されたものが多いようだ。

モルダヴィア地方は上記のような苦難を受けつつも、独自の文化を育んだ。市内にはモルダヴィア様式の傑作、三聖人教会があり、郊外にはガラタ修道院や要塞教会が残っている。

18世紀以降、ウクライナから多くのユダヤ人が移住し、19世紀後半には42の正教会を上回る、58のシナゴグがあったらしい。しかし20世紀初頭にユダヤ人迫害が始まり、大幅に減少した。

広場からシュテファン大公大通りを行くと間もなく以前は相互一車線の車道だったものが、歩行者専用道路となっている。広場から500メートルほどで、右側に大聖堂(正教)があり、左側は小さな公園になっていた。大聖堂は後でじっくり見ることにして、公園の奥に見える建物を目指した。100メートルちょっとで公園は終わり、イオニア式のファサードを持つ堂々とした建物は、ファサードの文字から国立劇場と判る。

1896年に竣工した、ルーマニアでは最古の国立劇場で、正式名称は国立劇場「バシレ・アレクサンドリ」(Teatrului Național „Vasile Alecsandri”)だった。この建物もルーマニア王国黄金時代の産物と云えそう。

ちなみにアレクサンドリは詩人、劇作家、民俗学者、政治家、大臣、外交官、ルーマニア・アカデミーの創設メンバー、ルーマニア劇場やルーマニアの劇文学の生みの親と云われている。上の画像に見える、劇場前に立つ銅像は彼のものらしい。

再びシュテファン大公大通りに戻って前進を再開した。正面の文化宮殿が次第に大きくなり、その間右手には大聖堂(カトリック)や三聖人教会などが見える。以前の歩道だったところで、民族楽器風の笛を吹く少年がいて、演奏は下手なもの素朴な笛が絵になりそう。しかしカメラを向ける前に気付いたのは、演奏が楽しみなどではなく有料の大道芸らしいことだ。それにしてもあまりに稚拙だが、ともかく撮影などすればしつこく金をせびられそう。君子危うきに近寄らずでそのまま足早に通過する。

文化宮殿はネオゴシック様式の巨大な建物で、モルドヴァ公国宮殿の廃墟跡に建設された。

1906年に工事は開始されたが、第一次大戦などにより完成したのは1925年だった。当初は市の行政府として使用されたそうだが、一地方の行政府がなぜ365の部屋からなる宮殿を必要としたのか、不可解なままだ。これまでも市庁舎が豪華なことに関する疑問はジュール、ペーチ、ブラショフ、シビウ、シギショアラに関して書いたが、ヤシの場合はその度合いが図抜けている。



国立劇場。



正面に文化宮殿。





宮殿の全面にこのような装飾が施されている。

第一次大戦でルーマニアはブコビナ、トランシルヴァニア、ドブロジャ、ベッサラビアを獲得して大ルーマニアを実現したから、宮殿完成時の国に横溢していたのはイケイケの気分だったのか。

ともかく日ガイドの見開きページに載っている画像でこの豪壮なさまに驚き、実物が見たくなった。内部が現在は四つの博物館になり、「それぞれが国を代表する重要な博物館である。」(日ガイド)との紹介にも背中を押された。

しかし宮殿に近づくに従い、期待が失望に変わった。建物の半分以上が作業用の足場に覆われているのだ。しかし外周だけの工事であれば博物館の見学は可能だ。一縷の望みで正面玄

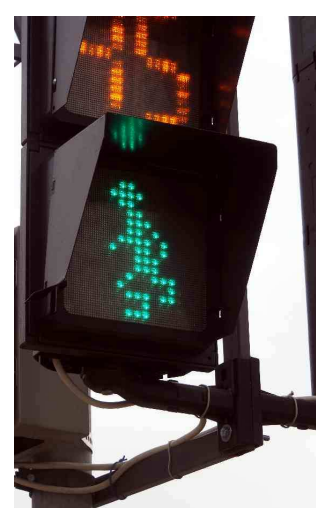
関まで行って見たが、この辺りも足場が生まれ、「休館中」などの掲示もなく、取り付く島もないまま来場者を拒んでいた。

「博物館は元々それほど好きじゃないし。」などと独りごちて諦める。方向を転じて宮殿の東側にある、巨大でモダンな建物を見に向かった。近づくに従い商業施設だろうと推定できた。しかしいざ建物の中に入ると、その巨大空間に圧倒された。

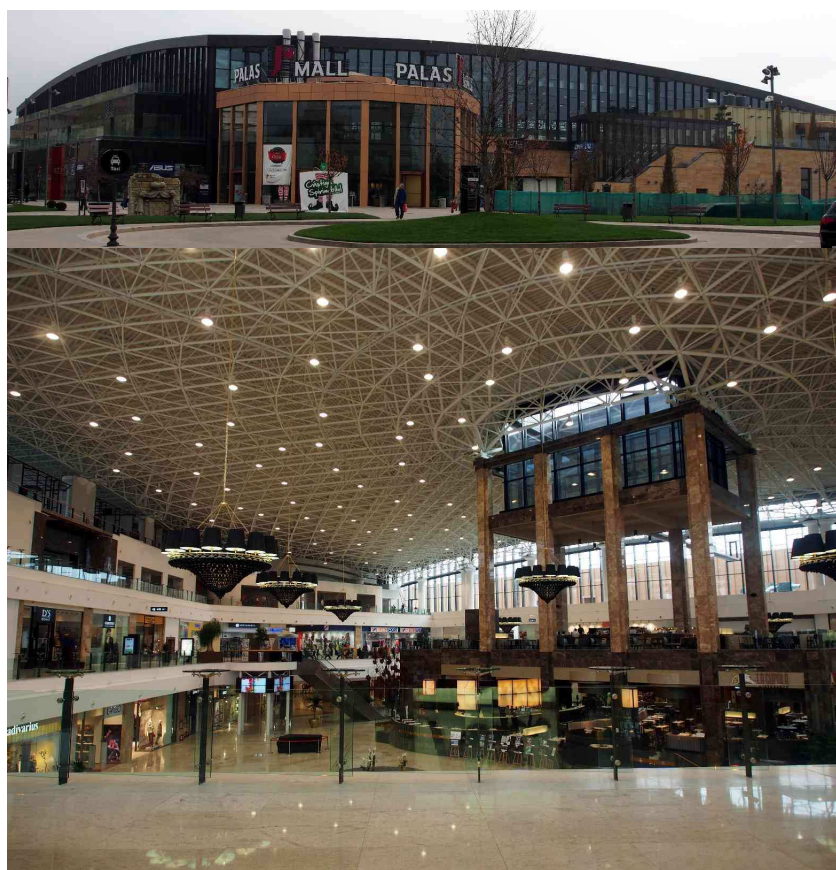
パラス・モールと名付けられたこの空間は(多分)54,200平方メートルの建築延べ床面積で、調べてみれば数値的にこれを上回る商業施設は日本にもそれなりにある。しかしそんなところに行くどころか近付いたこともないから、初めて見る光景にただ圧倒された次第だ。

入店しているブランドは、AUCHAN、ザラ、ベルシュカ、ストラディバリウス、プル&ベア、Oysho、Hervisスポーツ、C&A、セフォラ、STEFANEL、エコー、ロクシタン、インタースポート、リーバイス、コリンズ、KFCドライブスルー、Librariumなど(ルーマニア語版ウィキペディア情報)。しかし未知のブランドが多く、知っていてもせいぜい名前は聞いたことがある程度で、馴染みなどはさっぱりないから、此処の店を覗いてみる気はまるで起きなかった。

それでも執筆にあたり調べてみると興味深いことも判った。単独に商業施設として開発されたのではなく、文化宮殿を含む一帯の32万平方メートルをアーバン・アセンブリ・パラスの名の許に、公園、劇場、ショッピングモール、ホテル、オフィスビル、地下駐車場、住宅などの複合的な空間として再開発したらしい。



歩行者用信号のアニメーションは何回か見かけたが、これは出来が良かった。



上: パラス・モールの外観。下: 1階から見た内部。





聖ニコライ・ドムネスク教会。

イコノスタシス。

天井フレスコ画。

ショッピングモールから100メートルほどのところにある聖ニコライ・ドムネスク教会へ移動した。1492年にシュテファン大公が創建した由緒ある建物だが、その後手が加えられ、1884年に最後の大改築が行われた。



外部壁画

元々は典型的なモルドバ様式だったが、オリジナルはほとんど残っていないとのことで、現在見るものがどの程度モルドバ独自のものなのか、門外漢には良く判らなかつた。

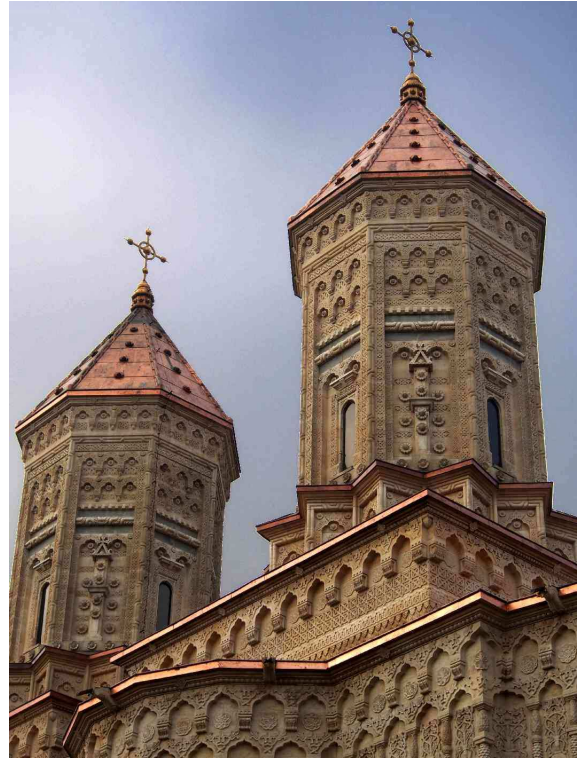
外壁に並ぶアーチ型の窪みに描かれた聖人達の壁画外部壁画(左画像)は、独特のものでこれまで見たことがない様式美を感じさせる。しかしこれがモルドバ様式かという、少なくともこの街で見た他の正教会ではこのようなアーチは見る事ができなかった。

ドムネスク教会の壁画は内外共に美しく、保存状態も良かった。このことは逆に云えば大改築から130年ほどの歴史しかないと言うことかもしれない。ともかく他の見物人や参拝者はいなかったの、壁画やイコンをじっくり眺めながら撮影することができた。

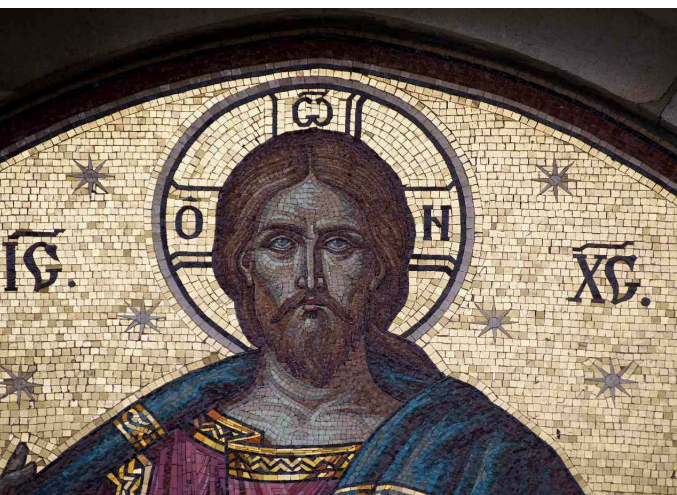


聖ニコライ・ドムネスク教会の内部壁画。

ドムネスク教会を退出すると、シュテファン大公大通りに面する三聖人教会へ移動した。徒歩4分の至近距離だ。

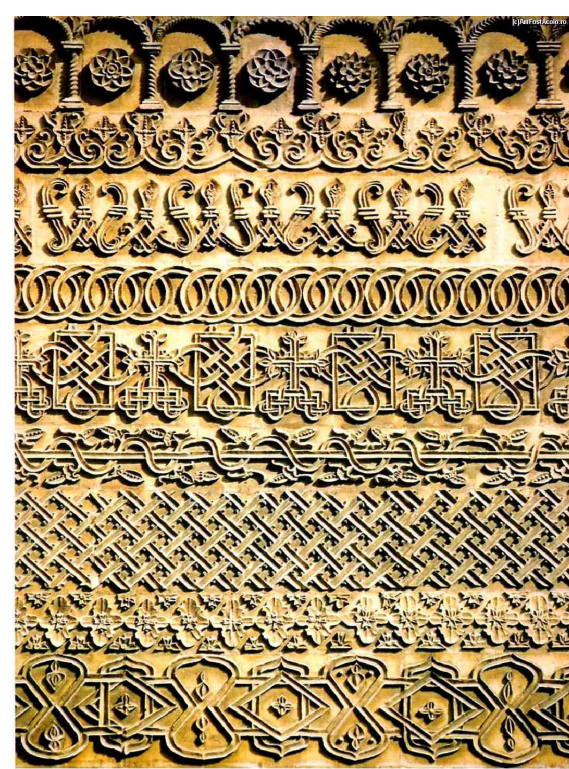


三聖人教会。



玄関アーチ部分に描かれたパントクラトールのモザイク画。





三聖人教会の外壁彫刻。インターネットから採取。

この教会は公国の王だったヴァシレ・ルプ公により1639年に建立された。彼は財務に長けていたので、当時の東方キリスト教国でもっとも裕福だと云われていたらしい。

その財力を惜しみなく注ぎ込んだ成果なのかは良く判らないが、この教会をヤシで一番と評価する人も多い。此処の拝観料は5lei (108円)で、内部の撮影は禁止だった。ちなみに公開時間や料金を掲示した貼り紙には、「学生や年金受給者 1lei」と書かれていた。此処で云う年金受給者とは単に年齢ではなく、実際に年金を受給していることが条件なのだろうか？ 拝観料を支払う際に資格を証明するには、日本流システムであれば年金手帳を携帯することが必要になってしまう。

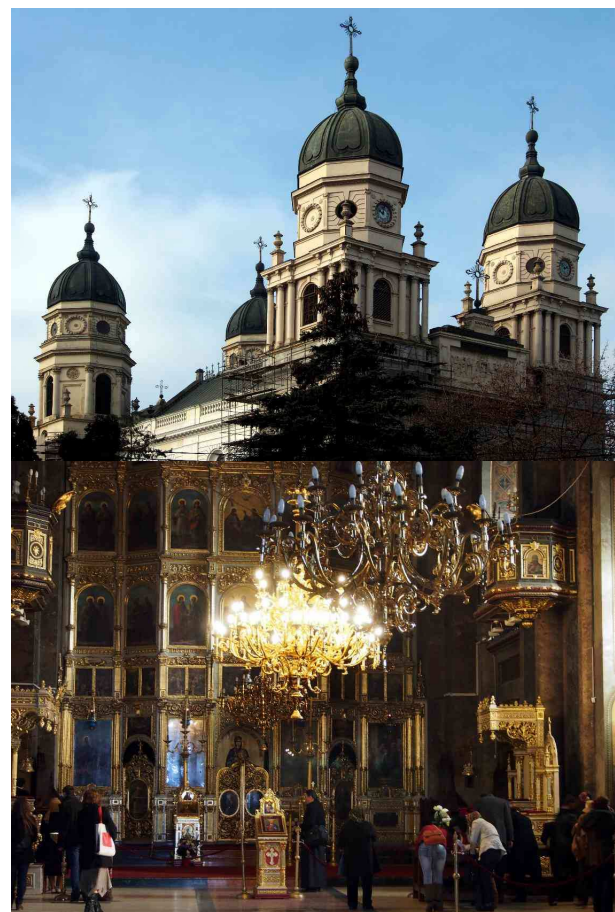
閑話休題。内部も外観に相応しい瀟洒で上品な佇まいだったように思うが、撮影できなかったこともあり、印象はかなり曖昧だ。短時間で立ち去ったことからすると、あまり感銘を受けなかったのかもしれない。

三聖人教会と敷地を接してカトリック教会のカテドラルがあった。同じ敷地内に二つの教会があり、新しい方は現在のカトリック大聖堂で、古い方はかつて大聖堂だった聖母被昇天教会だ。しかしすぐ隣に正教の首都大司教大聖堂がありこちらに気を取られていた。カトリック大聖堂の方は十字架を頂いていてもそのあまりにもモダンな外観に、瞥見したときとても教会とは思えずにともかく1枚撮影しただ

けで近寄ることもなかった。聖母被昇天教会は地味だったので三聖人教会の敷地からは1枚撮影したもの、正教大聖堂への移動中には見過ごしてしまった。

首都大司教大聖堂は聖母と聖ゲオルギオス、聖女パラスカバに捧げられた教会だ。この聖パラスカビがどんな聖人なのか調べても良く判らないが、11世紀にイスタンブールの近郊で生まれた。

列聖後に彼女の聖遺物は(主としてオスマントルコとの戦争(占領)の結果)各地を転々としたが、1641年に三聖人教会、1887年からはこの大聖堂に収められている。また彼女はモルドバの守護聖人的な存在らしい。



首都大司教大聖堂の外観とイコノスタシスなど。



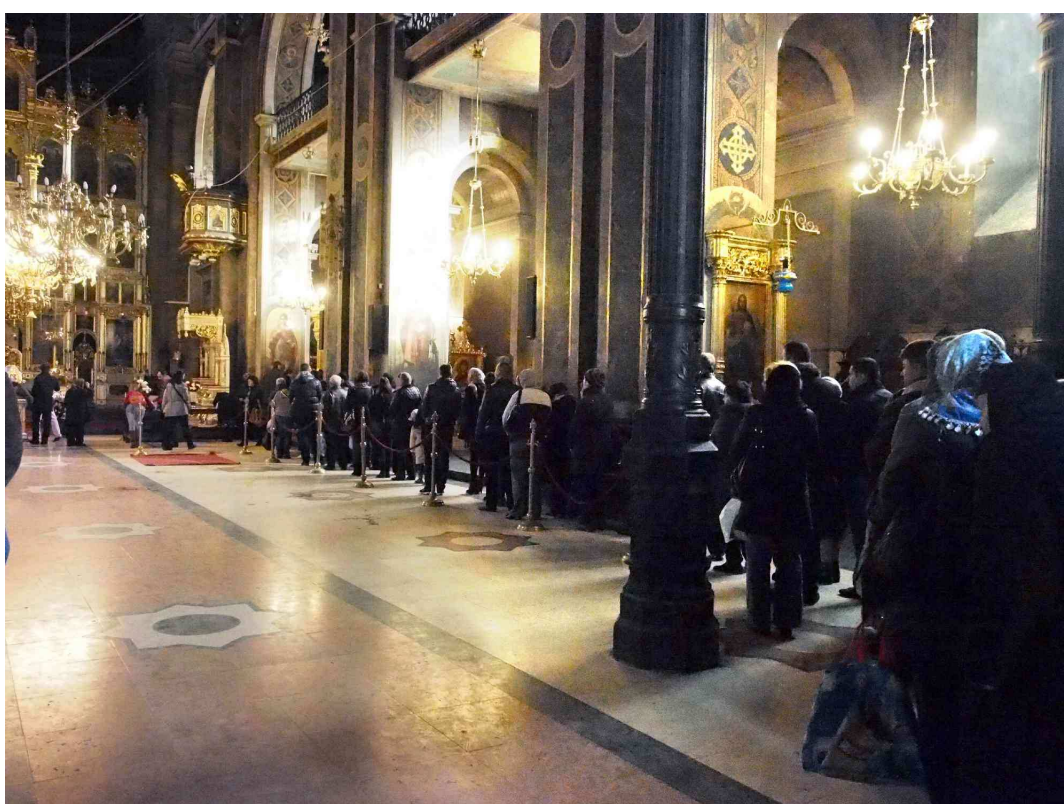
大聖堂は修復工事  
中のため、塔を除いた  
本体外壁には足場が  
組み、さらに場所によ  
っては養生シートで覆  
われていた。しかし不  
幸中の幸いと云うべき  
か、一旦内部に入って  
しまえば工事の影響な  
どは一切ない。

さすがは大聖堂だ  
けあって、イコノスタシ  
スは5段にもなった豪  
華なものだった。しかしそちらに向かう信徒は少なく、行列が出来ていたのはイコノスタシスの右側に置かれたものだ。聖遺物だろうか。だとすればこの聖堂の場合は聖女パラスカバの不朽体(正教会用語:遺体)だ。

ちなみにウィキペディアによると詣でた信者は、「十字を二回画き、そののち不朽体に接吻し、しかるのち祈禱し、再び十字を画く。接吻は必ずしも直接なされることを要さず、ガラスケース等を介して行われることがしばしばある。」のように崇敬を表するらしい。眼前で行われたことではあるが、失礼に当たるようであり近付いたり、ジロジロ眺めることはしなかったの、ルーマニア正教のやり方が記載のようであったかは検証出来なかった。

三大宗教の教会、モスク、寺院を比較してみると随分性格が異なるようだ。キリスト教では聖遺物を非常に重要視し、8世紀には聖人の遺体か、少なくともその一部が埋葬されていなくてはならないと定められたそうだ。こうなると教会は祈りのための集会所ではなく、仏教の仏舎利塔に近い意味が出て来る。これに対してモスクは明らかに集会所であり、聖遺物などはもちろん聖像も聖画も許されない。必須なのはミフラーブ(メッカの方角を示す壁の窪み)だけだ。これに対して仏教は(少なくとも日本の場合)本尊を祈りの対象とするが聖遺物が重要視される例は少ないようだ。また本尊が釈迦如来であれば、「教祖」と云うことでキリストとの類似が云えるかもしれないが、毘盧遮那仏等々の仏になると、実在の人間ではなく高度に思想的なものだろう。

余談はさておき、不朽体の詣でる行列は遅々として進まない。前記のような崇敬動作を取るならば、進まないのも当然だろう。通常15分から20分ぐらい待つらしい。しかしこちらは無宗教者だし、宗教美術の愛好者でもないの、先ほどから続いた教会巡り三連続にも飽きてしまった。時刻は12時を回ったし、昼食へと転進することにした。目指すは又々英ガイド推薦の食堂カサ・ラブリクだ。



首都大司教大聖堂で聖パラスカバの聖遺物に詣でる信者達の行列。



食堂への道すがら、国立劇場とアレクサンドリの銅像。





食堂カサ・ラブリク。上左：店内。二階にも部屋がある。上右：オーナーは歌手で、店内には楽器や古いポスターで装飾されている。  
下左：牛の骨髄(向こう側)と焼き野菜。下右：トマトサラダ。

国立劇場までは順調に辿ることが出来たが、その先で迷う。これは方向音痴のせいよりも、英ガイドの地図が正確ではなく、現地の地形と摺り合わせる事が出来なくなったためだ。しかし住所と街路表示を見たりして、何とか食堂カサ・ラブリクに行き着くことが出来た。

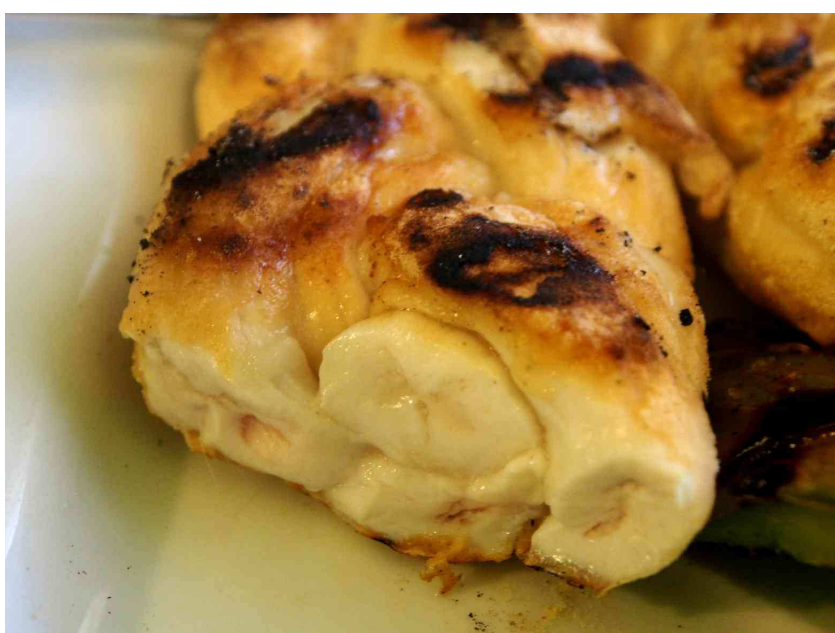
木造2階の一戸建てで、元は個人住宅だったのかもしれない。道路面から1メートルほど高くなったところが玄関で、中に入ると狭い玄関ホールの向こうに客席があり、男女のまだ若いウェーターとウェイトレスがいた。客室はそれほど広くないのが幾つかあるようで、先客だった中年婦人二人がいる部屋は避けて席を選んだ。

供されたお品書きは背を針金で綴じて製本したもので、だいぶ年期が入っている。品数は割に少ないが、メインの所を見ると、牛の脳味噌(調理法はフライ/グリル/ベイクから選べる)や睾丸の料理など、ゲテモノではないとしてもかなり変わったものを出すようだ。さすがに脳味噌や睾丸には食指が動かなかったが、骨髄のグリルはこれから私の旅で再び巡り会うこともあまりなさそうだし、それほど癖はないだろうと予想して、これを注文する。

付け合わせは野菜のグリルにして、それ以外にトマトサラダも加えた。後はハウスワインの赤をグラスで。ワインとロールパンはすぐに出されたが、後が続かない。室内に装飾として貼り出されている古いポスターなど撮影したりしてメインを待った。



最初に出されたワインは100cc程度だったのですぐ空になる。2杯目はダブルにして貰った。ワインを呑みながら待つこと20分ほどで、骨髓とトマトサラダと一緒に運ばれてきた。何となく輪切りにされた大腿骨などから骨髓を掻き出すようなことをイメージしていたが、眼前に置かれたものは随分違うものだった。

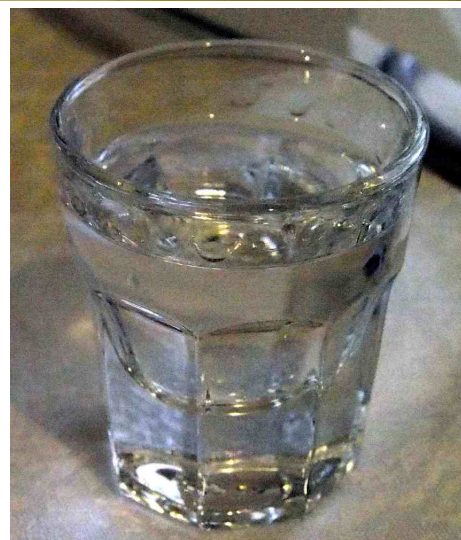


骨髓の拡大画像。

直径1センチから1.5センチくらいで棒状の骨髓を編み、4センチくらいの太さにしたものを、付け合わせ野菜と一緒に網に乗せて焼いたようだ。ともかく出された状態を撮影し、早速ナイフを入れて一口食べてみた。癖はないがかなり濃厚な味わいで脂肪分も多い。

付け合わせの焼き野菜を混ぜながら本格的に食べ始める。合間にサラダやワインで口直しし、パンにも手を出した。お品書きに書かれていた300gは付け合わせを含んだものと思うが、骨髓は剥き出しの正味だからかなり食べでがある。

骨髓がテーブルに運ばれてから間もなく、ボーイが小さめのグラスに注がれた透明な液体を持ってくと、「地酒の蒸留酒で、店からのサービスです。」とのことだ。札を云ってから、ごく少量口に含んでみる。アルコール以外を感じさせる味や香りはほとんどないが、かなりアルコール度数は高いようだ。



蒸留酒パリンカ。

最近は何度の高い酒をストレートで飲むのをやめていたのだが、供された酒を断るなど論外だし、割るための水などを頼むのも業腹だから少しずつ食べ物と一緒に飲んだ。確かに骨髓のような濃厚で脂肪の多い料理には、ワインよりこんな蒸留酒の方が合うような気がする。

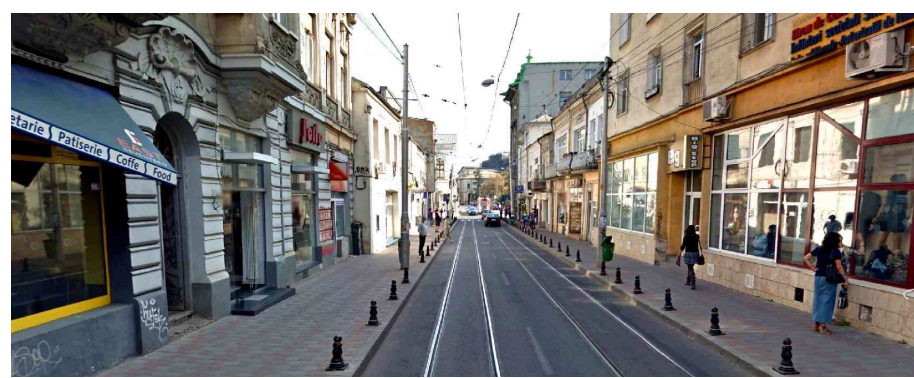
執筆にあたり調べたところ、どうやらこの酒はルーマニアやハンガリーで生産・消費されるパリンカらしい。「ツイカ」とも呼ばれ原材料はプラムが有名だが、ほかにもリンゴ、ナシ、ビワなどからも作られるらしく、アルコール度数は40度から50度程度。日本でも4、5千円で入手出来る。

話を元に戻すと、パリンカは飲み干したが料理はまだ残っていたので、ワインを追加する。しかし間に強い酒を挟んだのでこれで終わりにした。骨髓を食べ始めてから約40分で、サラダを若干残したほかは全て平らげ、カプチーノで終わりにする。勘定は骨髓18lei(390円)、付け合わせ野菜のグリル10lei(217円)、サラダ9lei(195円)、ロールパン1.5lei(33円)、ワイン500cc 8lei(174円)、カプチーノ6lei(130円)。いつものようにカードで支払い小銭でチップ。満ち足りた気分で店を出る。



クーザヴォーダ通りを走るヤシの路面電車。





クーザヴォーダ通り。グーグル・ストリートビューより。

沿道に大聖堂などがあり朝歩いたシュテファン大公大通りとほぼ並行する主要な通りとして、独立大通とクーザヴォーダ通りがある。前者は

相互三車線ある文字通りの大通だ。街路樹を緩衝帯にした幅広い歩道があるものの、散歩したい気分にはならない。ところが後者は打って変わり、交互一車線だが路面電車主体の通りで、車も通行出来るけれど走りにくいから、何か用事のある車以外は侵入してこない。

沿道には商店や飲食店が軒を並べ、庶民的な雰囲気を漂わす店が多い。買い物をするつもりはもちろんないし、興味を惹かれるような商品もないが、何となくショーウィンドーを見物しながら漫ろ歩く。

統一広場が近くなった辺りで通りと1989年12月14日広場の角地に、ロココ風の優雅な建物が見えた。4星ホテルのセレクトだ。ここも料金を調べると282lei(6,116円)と、グランドホテル・トライアンよりは高いものの泊まれない値段ではない。今さら宿替えも出来ないが、目移りするような宿が多いと街に対する印象も良くなる。ヤシが恵まれているのはブカレストと異なり、爆撃や地震、体系化政策などの災厄を免れているせいだろうか。



クーザヴォーダ通りと、1989年12月14日広場に面す4星ホテル・セレクト。

セレクトの広場に面したテラス席も魅力的だったが、食事を終えて、それをもたらふく胃袋に詰め込んで間もないから、カプチーノ1杯でも飲もうという気にはならなかった。

統一広場を横切り、宿へ下る坂道の手前で観光案内所があることに気付いた。以前ならば新しい街に辿り着けば、まずは情報収集に訪れたものだが、PC持参



ホテル・セレクトのテラス席。Booking.comの紹介画像より。

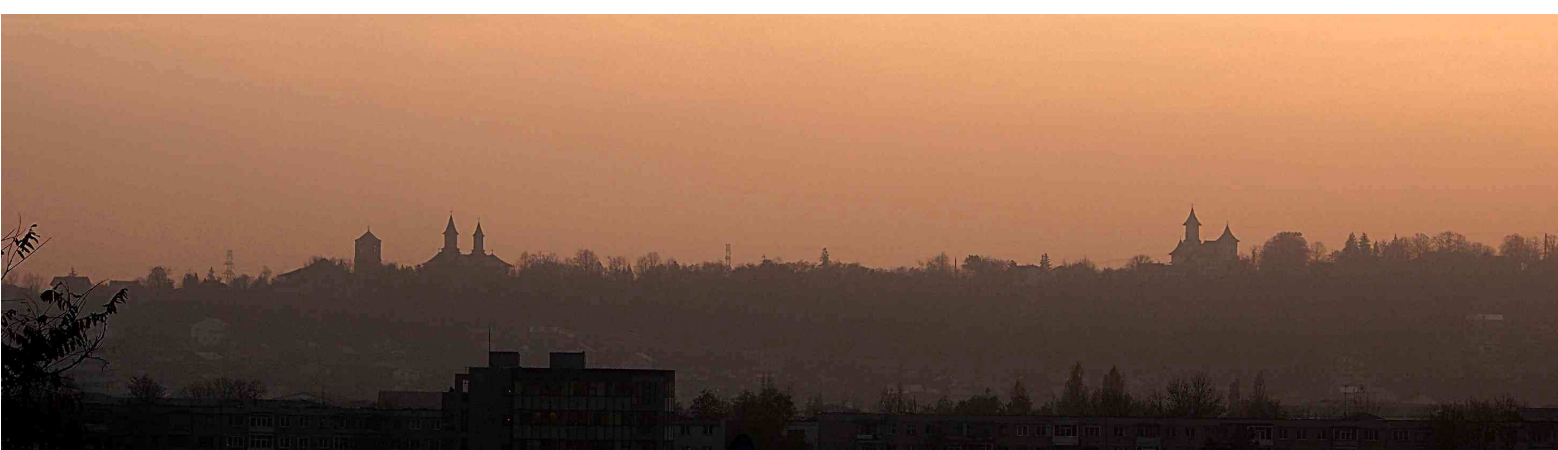
の今回はあまり必要を感じていない。そんなことで立ち寄りしなかったが一応前まで行き、利用可能な日時を調べた。平日が朝8時から夕方5時、土曜は朝9時から正午まで、日曜は休みだった。

後は真っ直ぐ宿まで帰り、一眠りする。



観光案内所の業務時間。





三聖人教会裏手から見る夕景。左にある尖塔などがガラタ修道院。右が聖インパラツィ・ガラタ教会。

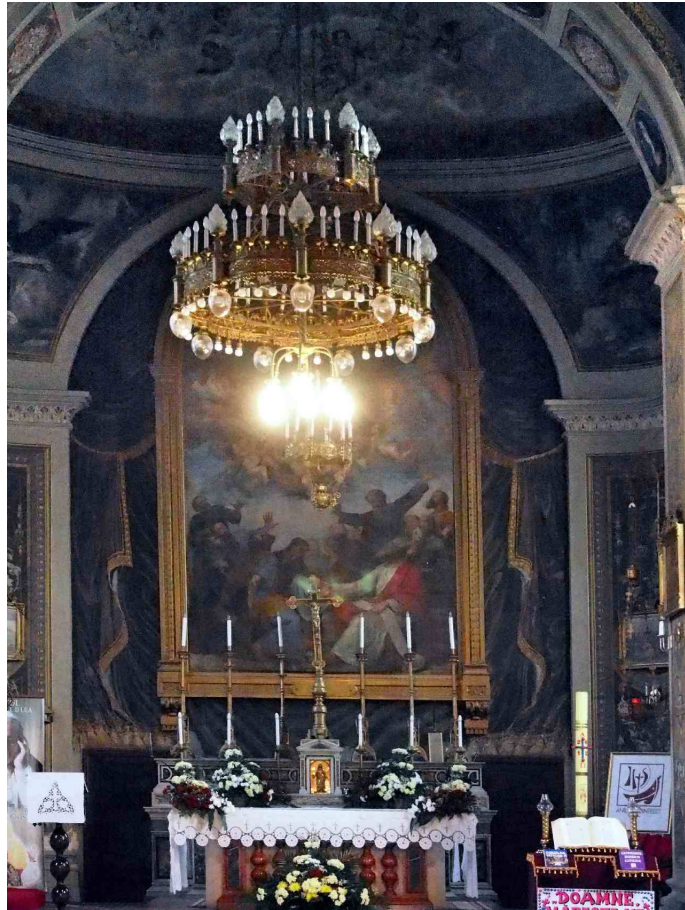
4時を回って散歩に出かける。ヤシの一般的見どころとしては、北部のコボウ公園や街からすこし離れて南にある要塞修道院やガラタ修道院などが挙げられる。しかし観光をして回る気分は既になく、そして散歩ならば自然に足が向くのはシュテファン大公大通りだ。

4時を過ぎているせいなのか、先ほどに較べると人通りは減っているようだ。首都大司教大聖堂などは大通りから鉄格子柵越しに眺めるだけで行きすぎたが、カトリック教会のところまでまだ内部を見ていないことに気付き寄り道する。

相変わらずモダンな建物がカテドラルとは思わず、三聖人教会敷地から見えた地味な聖母被昇天教会を訪ねる。年老いた夫婦らしい二人と擦れ違いに入ると、内部は無人でひっそりと静まりかえっていた。

1789年の創建で、それなりの歴史は感じられるものの、地味な外見に相応しい質素な内装だった。カソリックが主流とはならなかったこの地だから、当然のことかもしれない。それでも祈りを捧げる場としては好ましい静謐さと落ち着きが感じられた。これも無信仰者が咄嗟に感じたことだから、当てにならないこと甚だしい。

5分ほどで聖母被昇天教会をでて、隣の三聖人教会へ向かう。教会を見るためではなく、教会敷地南端からの景色を再見するためだ。これはかなり期待通りだった。夕焼け空としては華々しさに欠けているものの、彼方に見えるガラタ修道院や聖インパラツィ・ガラタ教会の尖塔などをシルエットで見ると、この方が落ち着きがあって良かった。



聖母被昇天教会内陣。



なんとなく共産主義時代の遺物を感じさせる集合住宅。



黄昏時に窓越しのシルエットを見るとなぜかドラマチックなものを感じてしまう。

三聖人教会から文化宮殿の方へ廻り、夕日に染まる宮殿を撮影してから、次第に闇の迫る道を宿へ引き返した。